

## 栄光の富によって強められる

「エペソ人への手紙」3章14～19節までを朗読。

16節「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるよう」。

今お読みしました16節から19節までは一つの祈りであります。19節の終わりに、「…、と祈る」とあります。では、誰に対して祈っているのか、すべての父と呼ばれる源なる父、すべてのものの根源と言われていたお方、この方に祈るといふのです。

私たちが祈るとき、誰に聞いて頂いているのか、これを忘れやすいのです。自分の思いを注ぎ出すことばかりに熱心ですから、この祈りを誰が聞いているのか、ただ単につぶやきで終わっていないか。その原因は祈りを聞いて下さるお方がどういう方であるか、はっきり自覚しないからです。あらゆるものの源なる父。すべてのものの根源であり、それをご自分の意のままに司っておられる全能の父なる神様に祈るのです。それを自覚すると、祈りが変わるに違いない。泣き言ばかり言っているわけにはいかない。すべてのものの根源である父なる神様が、私の祈りを聞いて下さると信じるなら、大変励まされますし、固く信仰に立つことができます。だから祈るたびに、今、誰に祈っているのか、この祈りを聞いて下さるのはどんなお方であるのかを自覚したい。

「エレミヤ書」には「地を造られた主、それを形造って、堅く立たせられた主、その名を主と名のる者がこう仰せられる。わたしに呼び求めよ。」(33:2-3)とされています。すべてのものの始まりであり、それらを御手をもって持ち運んでおられる神様が、わたしに呼び求めよとおっしゃる。だから呼び求めるのです。その祈りを神様が聞いて下さると、確信をもって祈る。これは私たちの特権であり、祝福であります。

16節から19節までに三つの事が祈られています。その一つが16節であります。「力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるよう」。

私たちの内なるものに、力を与えて、強くして下さいと祈る。17節には、キリストが私たちの内に宿って下さること。そしてキリストの愛をより一層深く知らせて下さいと。愛に根差し、愛を基として生活する。自分の生活がキリストの愛に根差していくことができるようにという願い、祈りであります。私どもは自分の思い通り、願い通り、自分が安心する生活を与えて下さいと祈ります。しかしここで祈られる祈りは、キリストが心の内に住んで、キリストとの交わり、愛の交わりの中であって、絶えずキリストと生活することです。たまに出会って、お茶でもしようかという話ではありません。24時間、365日、絶えずキリストと共に生きる者となり、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さをしっかりと味わう者になりたい、主のご愛を、もっと深く私たちが知りたいとい

う祈りであります。

というのは、キリストの愛から離れては救いがないからです。私たちにとって幸いなことは、イエス様が命がけで私たちを愛して下さっているその愛を知ること。もちろん十字架を通して注がれてくるキリストの愛ですが、その十字架を、日々の生活の真っただ中に置いていく。十字架とは何か。自分が死ぬことでしょうか。毎日の生活の中で、自分を十字架に釘づけて、キリストと共に死んで、よみがえりの主とともに生きる。内に住んで下さるキリストと愛の交わり。今生かされているのは、私たちの罪のために死んで下さったキリストを信じる信仰によって、生きているのです。キリストの愛に触れ、愛の深みにはまり込んでいきさえすれば、何も恐れるものがなくなる。また、不安な事、思い煩うことはなくなるからです。愛の中にしっかり取り込まれていくようになりたい。これは祈りをもって神様に求めているかなければ得られません。

最後に3つ目が、19節の祈りです。「また人知をはるかに超えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように」。キリストの愛に満たされ、キリストの愛を深く知ることができる。と同時に、今度はもう一つ、その愛を知って、神様に満ちているもののすべて、神様の中にある無尽蔵のもの、すべてのものを、私たちが受け継ぐ者となる。分かりやすく言うと、神様を全面的に信頼する者へと造

り変えていただく。満ちているもののすべてというのは、神様と私たちとが何一つ隔てなく、しっかりと結び合っ一つとなる、満ちているもののすべてをもって満たされる。言うならば神様の中に満ちているものとわたしの中にあるものが、同じものだと言えるほどになりたい。私たちが神になるわけではありませんが、神様と、何一つ妨げられない、また躊躇することのない、遠慮することのない、深い交わりに私たちが置かれること。これは私たちの祈りの大切な課題でもありますし、また求めている事でもあります。

16節に「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるよう」にあります。ここに内なる人とあります。ということは、それに対して外なる人があります。外なる人とは何か。内なる人とは何なのか。普段の生活でそういう切り分けをして、事を考えることはありませんが、聖書ではよくこの事が言われます。外なる人は日ごとに滅びるが、内なる人は日々新しくされていく。私たちの外なる人は絶えず失われ、滅び去っていく。その外なる人とは、まさに外側に見えている私たちの生活であります。また自分のからだと言ってもいいでしょうか。またからだを取り巻く生活のすべての事柄が、これは日ごとに失われていくのは、その通りであります。地上に生れて今に至るまで、どんどんと成長し、この世のいろいろなものを身につけ、生活しています。しかし、年齢を重ねていくと、外側のものはどんどんと失われて

いくと言いますか、消えてしまいます。必要がなくなってきました。現役を退いて、退職し、また家族を養って、成長させ、結婚させ、自立させて、ふと気づくと夫婦二人きり。あるいは、毎日が日曜日という風が変わってくる。状況が変化していく。これはもう当然の事だと思います。だから外なるものとは、そういう目に見え、手で触り、耳で聞く、そのような物理的また物質的条件、生活の環境、境遇、そういうものを指して、外なる人と言われます。

それに対して内なる人とは何か。これは当然、心、魂、そういう言葉で表されるものです。これは私たちの目には見えません。人の目にも見えません。自分ですら感じないことがあります。しかし私たちの内側に心という世界がある。さらにもっと深く、魂というもの、霊魂というものがある。神様が人をお造りになった時、すべての人に備えられた、神のいのちを受ける機能、働きです。それがすべての人の心にはある。永遠を思う思いを授けられたと「伝道の書」に語られています。永遠というのは、神様のことです。だから誰もが神様を恐れる心、神様を求める心があることは事実であります。時にそれがとんでもないものを神としてしまう間違いを犯しやすいのが罪に囚われた私たちの姿であります。いずれにしてもそういう目に見えない世界、私たちの内にある、外側に見えている自分とは違う世界がある。これが内なる人でありますね。

そして、栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さる。私たちが普段、求めるものは何か。内なる人ではなく、外なる人を求めますね。元気であって、生活が楽になって、こういうものが与えられて、もっとゆとりがある生活、あるいは経済的な面で、生活が楽になること、そういう事が自分の力、自分の生活していく礎、拠り所であると、人は思います。ですから、あれを蓄え、あれを持ち、有形無形のあらゆるものをもって、自分の生活の支えにしようとしています。それが自分の力だと思っただけです。しかし、そういう外なるものが失われていくのは確かなことです。それまで頼りにしてきたもの、これが力だ、これが私の拠り所、これさえあれば、と信じていたことは消えていきます。健康そのものと言われる人が、思いがけない病気で健康を失って、寝たきりになったり、認知症にかかって、物事を忘れてしまう事態に陥ったりする。それまで頼りとし、これさえあれば、と積み蓄えてきたものすらも、全部役に立たない事態や事柄の中に、置かれます。すでにそういう状況を体験しておられると思いますし、これからどういう風に変わっていくか、それは分かりません。となると、そういう事を恐れます。こうなったらどうしようか、あんならどうしようか。

私もついそういう事を考えます。昨日もたまたまテレビをつけましたら、寝たきりになった時の、おしめの問題を取り上げていました。おしめは子供や幼児の

問題ではない。大人の話です。ある人が、自分の母親を介護している。それまで元気だったお母さんが、骨粗しょう症を起して、ある日突然、転んで、腰を悪くし、寝たきりになってしまった。娘さんは、自宅で寝たきりになったお母さんの介護を始めた。いろいろな新しい体験にぶつかる。その中でも一番の問題は排泄をどう処理するか。これは一番の課題だということです。介護施設でも、トップにくる問題は排泄のことです。それは確かにそうだと思います。長年生活してきて、いろいろな思いがそこに込められています。

初めのうち、娘さんは、一生懸命お母さんの世話をし、大人のおしめはどういう種類があるか調べる。ホームセンターのような所に行くと、たくさん種類がある。サイズもあり、素材もあり、形もあり、用途に応じて、いろいろあります。どれを使っていいか、その方は分からなかった。それでとりあえず勧められるものを持って帰るが、上手くいかない。しているはずなのに失敗する。何か違う。いろいろなものを試すが、上手く行かない。そういう時、ヘルパーの方から教えられた。一度そういう事を勉強したらよい。おしめを当てるという状況にあたって、どういう風にしたらよいかを教える専門家がいる。それを教えてくれる教室に、2泊3日位行く。そうした時にはじめて、目からうろこです。なるほど、こうすることが一番ベストなのだ。今まで自分は、お母さんに対して、比較的緩やかにしていた。それではだめで、しっかり

ピシッと体に密着するようにはめてあげなければいけない。それで、その本人が自分ではめて寝なさいということになる。その中で用を足しなさいと言われる。その方が、後で感想として、「一晩苦しくて、始末することは自分にはできない。そういう抵抗感を乗り越えて、親は自分をそこに任せなければならない」のだと、相手の気持ちを深く体験する。そういう話を聞きながら、こっちも深刻になりました。自分が介護される側になって、どうそれを受け止めていけばいいのか。そういう時に、何が問題なのか。そこで大切なものは内なるものです。いくら頑張れと言ったって、外なるものは失われていく。もう戻らない。それをいくら元気づけようとしても、無理でしょう。だったら、その与えられた境遇、置かれた状況の中で、それを乗り越えていく力はどこにあるか。

そのようなときこそ、信仰に立たなければならぬ。内なる人を強くするにはこのことです。だから16節に「**あなたがたの内なる人を強くして下さるように**」と祈ります。これは私たちの切なる祈りであります。どういう事態の中に置かれようと、恥ずかしい、そんなことは嫌だと思ふ、そのような自我と言いますか、自己保身と言いますか、自分のプライド、これまで生きてきた自分の一切を、そこで投げ捨てなければいけません。私はよく老人ホームに行きますが、おしめをして集まります。そこにいると、「皆でそこにいるのだから、何の抵抗もない、同じファッションだからいいのではないか」

と思いますが、そうではない。一人一人が、受けている外側の状況の中で、どうそれを受け止め、どうそれを乗り越えていくのか。その力は、どこにあるのか。時には、自分のプライドも自分というものも傷つけられ、まるで生ける屍のように、力を無くして、気力のない姿の方もあります。私は自分の老後はどういう風に生きるか、もう一度、よく考えさせられます。何があっても、私にはこれがありますと、しっかり心を据えていく力を与えられたいと思います。そのためにはどうすればいいのか。内なる人を強くする、その手段は何か。何によって強くなることができるか。

それが16節「御霊により、力をもって」と、聖霊です。神様の霊に内なる人が常に満たされている事です。イエス様がよみがえられた後、40日間にわたって、ご自身を現わされて、証しされた後、弟子たちの見ている前で、天に帰られます。その直前にイエス様がおっしゃったのは、「あなたがたはエルサレムにとどまっていなさい。そして父の約束を待ちなさい」ということでした。父の約束して下さったものは何か。これは聖霊、御霊、真理の御霊と言われる、この霊を受けよとおっしゃったのです。というのは、彼らはそれまで、イエス様と一緒に生活を共にしていました。その間は目に見える物理的なかたちで、イエス様を見えていますから、心配があれば、問題があれば、イエス様がすべて解決して下さる。ところがイエス様がいなくなってしまった。その後はどうするか。彼らは力がありません。

まさにペテロのように、「私はあなたについていきます」と言いながらも、いよいよわが身が危ないと思った時には、イエス様を拒む。その弱さのゆえに、彼は嘆き悲しんだに違いない。弱いのです、私たちは。そういう外側の状況に応じて、心は振り回されて、思いもかけない、自分の願いもしないような事態を引き起こしてしまいます。

イエス様が何とおっしゃったか。イエス様は天にお帰りになる前に、弟子たちに「エルサレムにとどまって、父の約束を待ちなさい。それを受けるまで待ちなさい」と、その後、「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」と言われました。最初に「力を受けて」と、「神様からの力を受けよ」、これがなければ、一步も半歩も私たちは歩けない、動けない、神様のみこころに従うことができないからです。弟子たちが、ペテロのように弱いままではこれではできません。神様の霊が心にあふれて来る時に、御霊が私たちの力となる。私たちの心を支えて下さる。それは今も変わりません。外側の事情境遇、問題、事柄がないように、あるいは思うように願うようにしてほしいと。それももちろんのことでしょうが、何よりも私たちが求めたいことは、神の霊に満たして、内なる人を強くしていただくこと。「あなたの力を私のうちに注いで下さい」と、御霊を求めることが何よりも大切です。これはイエス様が弟子たちにお命じになったこ

とです。

イエス様はよみがえられた日の夜、弟子たちが隠れているところに現れて下さいました。その時「息を吹きかけて仰せになった。『聖霊を受けよ』と。「聖霊を受けなさい」。これがすべてに先立つ第一の事、まずこれがなければ続かないからです。それは今でも変わることがない真理です。私たちも神の御霊に満たされなければ、力を得ることができません。身体的な力、物理的な力、そういう外側の力は、トレーニングしたり、栄養剤などで、幾分かは元気になるかもしれませんが、しかし肝心の心が弱ると、外側のものがどんなに恵まれたものであっても、何ひとつ力になりません。私たちにとって、一番大切なのは神の霊、御霊に絶えず心が満たされていることです。ですから、弟子たちはそのままエルサレムにとどまって、イエス様が天に帰られた後、10日間の間でしたが、父なる神様の約束を待ち望みました。五旬節の朝、集まっていたところに神の御霊が注がれました。神様からの力を受けた時、弟子たちは一気に変わりました。イエス様を裏切った弱虫のペテロが、あのペテロと同じかと思う位に、豹変していきます。その力はどこからきたのか。彼が秘かにスポーツジムに通ったのではありません。ただ祈って、祈って、主の力を待ち望むのです。内に力があふれて来た時、彼らの外側は以前の彼らと、どこも違いはないのですが、肝心の心が違う、魂が変わる。いのちが注がれた時、彼は大胆にイエス・キリストが神の御子であり、救い主でいら

っしゃることを、町に出て行って、大胆に証ししています。それまでは人を恐れ、ひっそりと息を殺すように隠れていた彼らです。ところがもはやその必要がない。大胆に、力に満たされたのです。その力は肉体の力、外側の力ではなく、内なるものが力に満たされたからです。だから16節に「**御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強く**」と祈ります。神の御霊によって私たちの魂が力にあふれていくこと。先程のテレビの番組を見ながら、こういう事態、それ以上の事態があるかもしれない。それは分かりません。たとえ外なる人は滅びていこうとも、私たちの内なる人は日ごとに新しくなる。日ごとに、毎朝、毎朝、主の力を求めて、神様の力によって、内なる人を強くしていただく。それがなければ、私たちは動けません。失われてしまうだけです。

そうならないために、常に祈り、祈り、祈って、主を待ち望んでいく。「詩篇」には「力は神にあり」(62:11)と語られています。すべての力は神様から与えられます。もちろん、外なる人の力もそうです。神様は、必要なものを、必要なだけ、具体的に答えて下さるお方です。私たちにとって、何よりも必要なものは、内なるものが強くされること。その力は外側からは来ない。上から来るのです。神様から注がれてくる。そのために心を低くして、求めなければ得られません。神様、どうぞ、この者の思いをきよめて、あなたの霊の力に満たして下さいと、御霊が私の内に宿って下さいと、はっきりと信じて、主が命と力を与えて下さいますと、

確信が得られるまで、祈り求めていく。  
また、私たちが心静めて、主を待ち望む  
のです。ですから「イザヤ書」を読みま  
しょう。

「イザヤ書」40章27～31節を朗読。

31節に、「しかし主を待ち望む者」、主  
を待ち望む者、神様に信頼する、神様に  
期待する、神様に望みを持つことです。  
その者は力を得るとあります。新たなる  
力。神様が私たちに力を注いで下さる。  
神様の前に出て、「あなたの力を与えて下  
さい」と絶えず、朝ごとに神様の前に出  
て、祈り、御言によって心を探られ、御  
霊の働きに自らの思いを整えられて、「さ  
あ、今日もあなたにお仕えしてまいりま  
す」と、はっきりと、主の御手に自分を  
ささげ、ゆだねて、一日を過ごす。また  
一日が終わる時に、心から主のなして下  
さったすべての恵みを覚えて、感謝をさ  
さげて、終わる。そのような一日を過ご  
していきたい。それが私たちの内なる人  
を強くしていく秘訣だからです。絶えず  
御霊が私たちの内に臨んで下さる。

だからパウロが言うように、ダビデの  
子孫から生れ、死人のうちからよみがえ  
ったイエス・キリストを、いつも思っ  
ていなさいという、主イエスをいつも思  
うことが、実は私たちにとって力だから  
です。イエス様のことを思う時に、神の御  
霊は、私たちの内に働いて下さる。知恵  
となり、また望みを与え、慰めを与え、  
平安を与えて、内なるものを強くして下  
さる。そうすると、外側がどんなに崩れ

ようと、大嵐に遭おうと、揺れ動こうと、  
私たちの心はピタッと微動だにしない、  
不動のものと、神様はして下さる。その  
力は私たちの内にそもそもありません。  
自分で頑張って、どうこう出来ませんか  
ら、神様に、へりくだって、祈り求め、  
御言によって注がれてくる神様の力を体  
験する以外にないのです。

「しかし主を待ち望む者は、わしのよ  
うに翼をはって、のぼることができる」。  
鷺という鳥は、決して羽ばたきはしませ  
ん。ただ大きな羽を広げるだけ。谷から  
吹き上がる上昇気流にのって、どんど  
ん上へあがります。また山肌を下っていく  
気流にのって、下へと下がっていきます。  
上がるも自在、下がるも自在、自由自  
在に大空を駆け巡る力はどこから来るの  
か。それは自分の力ではない。風の力だ  
す。そのように神様の霊の力が私たち  
を吹き上げて下さる、持ち運んで下さ  
るのがあります。どんな困難の中であ  
らうと、苦しみの中であらうと、神様  
の霊が私たちを支え、内なるものを  
強くして下さる時、決しておしまい  
になることはありません。この約束に  
ありますように、走っても疲れること  
なく、歩いても弱ることはない。外側  
の力は当然のごとく失われていきま  
す。しかし変わりゆく外の状況、条件、  
それがどんなであつても、内なるもの  
が、心が、魂が、しっかりと主に結  
びついている限り、どんな事があつ  
ても、感謝であり、喜びであり、望  
みが消えないのです。

初めに戻りますが、「エペソ人への手紙」

3章16節「どうか父が、その栄光の富に  
したがって、御霊により、力をもってあなた  
がたの内なる人を強くして下さるよう  
に」。いつもこのことをまず第一に求めて  
いきたい。神様は私たちが日々求めると  
ころにしたがって、力を注ぐと約束して  
下さっています。外側はどんな事態にな  
るか分かりませんが、この力に日々満た  
されて、絶えず上を見あげて、従順に、  
主の手を信じて、導かれるところに従っ  
ていきたいと思います。

ご一緒にお祈りを致しましょう。